

## 2010 年度共同利用・共同研究課題申請書（新規）

申請者(主査)：渡辺 己

<b>1. 共同利用・共同研究課題名</b>	
和文	節連結に関する通言語的研究
英文	Cross-linguistic studies on clause combining
<b>2. 研究期間</b>	2010（平成 22）年度 ～ 2012（平成 24）年度（3 年間計画）
<b>3. 共同利用・共同研究課題を実施する専任教員</b>	（氏名）渡辺 己（役割分担）主査，成果刊行物編集（責任者），セイリッシュ語研究
（同上）	（氏名）中山 俊秀（役割分担）副査，成果刊行物編集，ワカシュ語研究
（同上）	（氏名）呉人 徳司（役割分担）成果刊行物編集，チュクチ語研究
（同上）	（氏名）澤田 英夫（役割分担）成果刊行物編集，ロンウォー語研究
（同上）	（氏名）塩原 朝子（役割分担）成果刊行物編集，インドネシア諸語研究
（同上）	（氏名）星 泉（役割分担）成果刊行物編集，チベット語研究
<b>4. 共同研究員採択数</b>	およそ 15 名（国内 8～10 名，国外 5～6 人）
<b>5. 共同研究員に求められる役割分担</b>	それぞれが専門として調査研究している言語からの情報を提供し，本課題に沿った報告をおこない，研究会において研究討議に参加すること。成果とりまとめの論集の編集にあたっては，編者から依頼された査読をおこなうこと。
<b>6. 共同利用・共同研究課題の概要（400 字程度）</b> （※要覧等広報の際にも利用・掲載します。）	
<p>通言語的な比較対照研究は，単一の節（あるいは単一の節からなる単文）をもとにおこなわれることが多い。しかし，およそ自然言語であれば，実際の運用にあたっては複数の節が連続して現われる。その際の節のつながり方はさまざまで，大きくは等位的か従属的な連結が考えられる。本研究課題では，形態統語的に多様な言語を専門とする国内外の研究者を集めることにより，典型的に異なるタイプの言語がそれぞれにおいてどのように節を連結していくのか考察し，そこに節連結に関する類型的特点，あるいは通言語的共通点を探るものである。</p> <p>さらに特に近年になり，形態統語的には従属節だと考えられるものが，自然談話のなかで主節なしで単独で現われる現象（「言いさし」，“insubordination”）が通言語的に研究されるようになった。本研究課題ではこのような現象を含め，言語の実際の運用における節連結を視野におきながら研究を進める。</p> <p>なお，本研究課題は，特別教育研究経費「言語ダイナミクス科学研究プロジェクト（LingDy）」の活動の一環とする。</p>	
<b>7. 研究の目的（400 字程度）</b>	
<p>本研究課題は，形態統語的に多様なタイプの言語において，ふたつ以上の節がどのように連結していくか考察する。アジア・アフリカの諸言語を念頭におきつつ，他の地域の言語との比較対照を通し，節連結に見られる多様性と共通性を，通言語的に幅広く探ることを目的とする。</p> <p>等位的接続と従属的接続の他にも，本研究課題では，形式的には従属節だと考えられるものが，主節に伴われずに現れる現象など，異なるタイプの節が自然談話の中で実際にどのように現れるのかについても念頭に置きつつ，複数の節が連結していく姿をとらえることを試みる。</p>	

**8. 研究の意義、特に共同利用・共同研究として展開することの意義（400 字程度）**

等位的接続や従属的接続などの節連結について、個別言語においてはこれまでもさまざまな研究がおこなわれてきたが、類型的に異なるタイプの言語間でそれらがどのように異なる形式を見せるのか、あるいは共通点を持つか、通言語的な研究はこれまで十分に研究がされてきたとは必ずしも言えない。特に複数の言語を対象にしようとする、個人（あるいは少人数）が文法書などの文献を頼りに研究するほかはなく、おのずと限界があった。本研究課題は形態統語的に異なるタイプの言語を研究対象としている研究者が集まり、言語における節連結の現れ方を考察することによって、個人研究では得にくい、精度が高く、洞察の深い成果があげられることが期待できるため、共同研究として展開する意義のある研究課題となると考えられる。

**9. 共同利用・共同研究として期待される研究成果、および共同利用・共同研究効果（400 字程度）**

単文あるいは単一の節を越え、節と節がつながっていく形態統語法は、一言語の文法研究のなかでも、その言語に関する深い理解が必要とされる分野である。そこで、このような文法現象を通言語的に考察するためには、異なる言語を専門とする研究者が集まり、共同して研究をおこなうことが、もっとも信頼のできる成果をあげられると考えられる。

そして一方では、本研究課題は参加者それぞれにとり、自分が専門とする言語以外のさまざまな言語における節連結について知識を得る機会となる。その新たな知見により、各々が専門とする言語の節連結に関する記述を深め、それがさらにはより広く、その言語の研究に寄与することになるという波及効果が期待できる。

さらに、本研究の課題である節連結は、およそ自然言語であれば特定の地域や類型的タイプにかぎられず、どの言語にも見られる現象である。AA 研が拠点として、様々なタイプの言語を専門とする全国の研究者をつなげるためにも有意義な研究課題になることが考えられる。

**10. 研究の実施計画（800 字程度）**

本研究課題は、実施期間を 3 年間とし、特にその 3 年目は、主に成果の取りまとめをおこなう年度とする。

初年度（H22 年度）は、3 回の研究会をおこなう。最初の 2 回は、それぞれ国内の研究者 3～4 名が研究発表をおこなう。3 回目は、国外研究者 2～3 名を含む 7～8 名の発表をおこなうワークショップとする。

2 年目（H23 年度）は、国内の研究者 3～4 名が発表をおこなう研究会を 2 回おこなったのち、国外研究者 4～5 名を交えた国際シンポジウムを開催する。

最終年度（H24 年度）は、本研究課題の成果として論集の取りまとめをおこなう期間とする。年度の初めに論集の方針を討議する打合せをおこなう。年度後半には、参加者からの原稿を集めひとつの原稿につき、参加者 2 名による内部査読をおこない、それぞれの質の向上と論集全体の統一をはかる。

なお、研究会以外でも参加者が意見交換や議論ができるよう、メーリングリストとウェブサイトを設け、研究会が単発的なものにならないように努める。この他、研究集会については、諸般の事情から本研究課題に恒常的に共同研究員として参加できない研究者についても、有意義であると考えられれば、ゲストスピーカーとして研究発表を依頼する。

**11. 研究成果の公開計画（200 字程度）**

2 年目（H23 年度）に国外研究者 4～5 名を交えて開催する国際シンポジウムを広く一般に公開する。最終年度あるいは研究課題期間終了後に研究課題の成果として論集を取りまとめ刊行する。

**12. 応募者に求める提出書類**

- ・本研究課題に関する関心について自由作文（200 字程度）